

太宰府の文化財

161

石造の社殿

近所の神社のお社をつくづくとき眺めたことはありますか。普通拝む所は鈴が下がった木造の建物の前で、それは拝殿と呼ばれる建物であることがほとんどです。そしてその奥に拝殿より小振りの建物が建っていると思いますが、それが神様が鎮座する本殿なのです。今回はその本殿が石造りのものを取り上げてみます。



▲秋葉神社本殿

①秋葉神社本殿

高さ146cm 松川区

高さ143・5cmの石垣積基壇の上に建ち、壁・扉・屋根など7個の石材から組み立てられています。正面に向かって左側の壁には「元治二乙丑歳／四月吉日」と刻まれています。元治2年とは幕末の1865年に当たり、4月7

日には元治から慶応へと改元され、3年後の明治維新に向って、めまぐるしく社会が変化していった時代です。

黒田藩では、江戸時代中期ごろから新田開発が盛んになり、特に下級武士の次男・三男対策として入植開墾が奨励されました。松川地区も文化年間（1804～1818）

に那珂郡屋形原から入植して来た人々によって集落が形成されたとの言い伝えがあります。入植して50～60年経ち、開墾も一段落したところかもしれませんね。元治2年は。

なお、秋葉神社は火除けの神様です。

②国分天満宮本殿

高さ281・4cm 国分区

花崗岩製で14個の部材から作られており、背面には「奉再建石寶殿一字／弘化四丁未年／三月吉祥日産子中／石工白水久兵衛」と刻まれています。石工の白水久兵衛は明治37年3月に竣工した境内の周

圍の玉垣の石工としても名を止めていますし、水城の老松神社の明治36年3月奉納の狛犬そして大正9年10月建立された石幟にも石工で名が刻まれています。ただ弘化4年は1847年、大正9年は1920年でその間は73年ですが、弘化4年には既に成人して一人前の石工だったのでしょうから、これらが全て同一人物と考えるのは少し無理があるかもしれません。

③若宮八幡宮

高さ1280cm 国分区

国分寺の後ろの大きなムクノキのそばにあります。砂岩製で屋根や扉は一部破損していますが、江戸時代の亨和4年（1804）に建てられたことが、割れた扉に刻まれた銘で分かります。市内に残る石造社殿の中では一番古いものです。

ほかにも水城の老松社が江戸時代最後の慶応3年（1867）に、向佐野の丸山神社



▶若宮八幡宮

が明治23年、国分の衣掛天満宮が明治29年、坂本の八幡宮が大正11年に造られた石造社殿を持っています。

興味深いのは江戸時代に造られた社殿には「産子中」と、明治以降は「氏子中」と寄進した氏子の人たちを書いていきます。これは氏神と産土神が混同され、江戸時代には氏子を産子と呼ぶようになり、それが使われたのでしょうか。明治になって氏子に変わるのには、氏子制度が法制化され、公的には産土神ではなく氏神・氏子が一般化したためと考えられます。こんなことから社会や歴史が見えてきます。

太宰府の文化財

鎮壇具

7世紀末～8世紀前半
大宰府跡出土

162



写真提供：九州歴史資料館

建築や土木工事の開始にあたり、工事の安全を土地の神に祈り、その地を清める祭を地鎮祭といいますが、その時、地下にいろいろな宝器を埋めます。それらの埋納物を鎮壇具と称しました。

鎮壇具の例の多くは寺院の建立に際してのもので、古い例では、奈良県明日香村にある飛鳥寺の6世紀末と考えられる塔の心礎に埋納されたものがあります。また奈良の東大寺や興福寺、元興寺、法華寺などからも鎮壇具が見つかっており、それらは水晶や琥珀製の玉類、金、銀、銭、鏡、刀剣、鏡などの宝物や魔除け用と思われる品々でした。

寺院以外でも次のような記録があり、京や宮を造営するときも地鎮祭をしたことが分かっています。

『日本書紀』に、持統天皇5年(691)10月、使を遣わして藤原京を鎮め祭らせ、同じく6年(692)5月の条には藤原の宮地を鎮め祭ら

せたと書かれています。また和銅元年(708)12月は平城宮の地を鎮め祭つたとあります。ただ現在のところ、これらの宮跡では鎮壇具は出土していません。

ところが太宰府では寺院以外で鎮壇具が出土したのです。

ちょうど今から30年前の昭和43年から始まった大宰府跡の発掘調査で南門跡と中門跡から鎮壇具と思われる須恵器の壺が見つかりました。

南門では門の中心部に当たるあたりに、小さな穴を掘って短い頸の壺(写真の①)が埋められていました。そして壺の中には数個の小石とその下に8個の水晶が納められていました。

中門の方は、同じく中央部に南門のものと同く似た短頸壺(写真の②)が、西北の隅には頸の長い壺(写真の③)が埋められていました。長頸壺には何も入っていませんでしたが、短頸壺には7個の水晶と9個の琥珀そして小石が

9個、入れられていました。

2つの短頸壺は肩などに朱が塗られており、3個の壺はいずれも意識的に穴に埋められた状態で出土したことなどから、これらは棄てられたものではなく、地鎮に使われたと考えられています。

そして役所域でも実際に地鎮の儀式が行われたことを証明する貴重な資料となりました。

さらに、長頸壺が7世紀末から8世紀初頭、短頸壺が8世紀前半代に作られたと考えられることから、これらが埋められて、建物が建てられた時期、つまり大宰府政庁に大きな礎石を持つ立派な建物が造営された年代が、8世紀前半と推定される有力な手掛かりにもなったのです。

さて、これらの鎮壇具は11月29日まで開催される九州歴史資料館の大宰府史跡発掘調査30周年記念特別展「大宰府復元」で見ることが出来ます。

原山出土の石造物



▲層塔残欠

原山無量寺の本堂跡と伝えられる所（現在の三条一丁目）で、昭和45年3月、造成中に発見された石造物です。

層塔残欠 凝灰岩

基礎石	高10cm	幅43cm
初層塔身	高さ26cm	幅27・5cm
初層笠	高さ16・5cm	幅44cm

これは三重か、それ以上の何重の塔かの一部です。

初層（一番下）の塔身には阿彌陀如来と地藏菩薩が交互に浮き彫りにされ、それぞれの両側に「南無阿彌陀佛」「南無地藏菩薩」と彫られています。2層目と3層目の塔身も南無の文字は刻まれています。が、初層と同様に阿彌陀如来と地藏菩薩の二つの仏様が浮

き彫りにされています。

笠（屋根）は下部に、つまり軒裏に、屋根の裏板を支える役目の極が2段に彫り出されています。このように極を彫り出した笠を持つものは、太宰府では現在のところ、ほかに推定金光寺跡から出土した滑石製の宝塔に見られるだけです。この周辺では大川市の風浪神社の五重石塔、佐賀県太良町の観世音寺の三重双塔、唐津市の千々賀の角宝塔、熊本市本光寺の石塔婆、同市蓮台寺の三重石塔などがこのような笠を持っています。

これらの石塔の材質はほとんどが阿蘇系の凝灰岩です。

以上を考えると、原山の層塔が影響を受けた文化圏が想像されます。

ところで、層塔は何のために造られたかという点、その

多くは舍利塔あるいは供養塔としてでした。この層塔も基礎石、初層・2層の塔身に孔が穿たれていて、この中に経典や仏舎利などを納めたとも考えられます。

なかなか興味深い層塔です

板碑

高106cm 幅54cm

風化が激しく、はっきり見えませんが、阿彌陀如来座像が浮き彫りされています。その反対の面には、阿彌陀如来



▲板碑

（袈）、観音菩薩（札）、勢至菩薩（サカ）の阿彌陀三尊を表す梵字が刻まれています。板碑とは石で造られた板状の供養塔のことです。

この板碑は九州歴史資料館に移されて建物そばの緑地に建っています。

五輪塔残欠

地輪 高さ16cm 幅24・8cm

五輪塔の地輪（一番下の部分）ですが、鎌倉時代の弘安2年（1279）の年号が刻まれている貴重です。中

心には五輪塔五大涅槃門の大日如来の真言（梵）の梵字が、その両側に「筑前国太宰府云々」と微かに読めます。

が、残念ながら年号などが刻まれていないため、いつごろ造られたものかはつきりしませんが、おおよそ南北朝時代に造られたものではないかと推定されています。

太宰府の文化財

板絵菅公像

164



江戸時代 佐脇高之筆

銅板着色

大きさ 縦90・4cm

横91・1cm

太宰府天満宮蔵

天神信仰の広がりとともに菅原道真を神格化した天神像がいろいろ作られるようになります。室町時代から江戸時代のことです。

「東帯天神」「綱敷天神」「渡唐天神」などが代表的な画題です。

初期のころの絵は怒りの表情をしているものも多いですが、だんだん威厳はあつても温和な表情の天神像に変わっていきます。

さて、この絵は東帯姿の菅公を描いた「東帯天神像」です。東帯とは天皇をはじめ官人たちが朝廷の政務や儀式を行うときに着る正服のことです。

画家は、「佐脇指」の署名から英一蝶の門人、佐脇高之で、延享4年（1747）の作品です。保存状態もいいですが、衝立の金箔をはじめ、鮮やかな彩色は豪華な印象を与えます。なお、背景の松と梅は菅公が愛した木ということで、このような天神画像には必ずといっていいくらい描かれるものです。

太宰府へ流される途中、上陸した地で、座る所もないので、浜の漁師が船の大綱を巻いて座ぶとんの代わりにしたという伝説を題材にしているのが「綱敷天神像」です。綱の円座に菅公が座る姿に描かれることが多いです。

「渡唐天神像」は平成8年3月1日号を参照ください。

梵鐘

新春のお慶びを

申し上げます。

九州国立博物館が着工に向けて動き始めた。「日本文化の形成をアジア史的観点から捉える」という新しい視点をもった「歴史博物館」。

また、博物館と地域とが連携し、相互に協力を行いながら、調査研究の成果を生かした公開講座、体験型の各種行事など地域に開かれた機能も今考えられている。

平成10年度には「基本計画」、平成11年度に「基本設計」、平成12年度に「実施設計」というスケジュール。

市は、博物館設置のインパクトを効果的に生かした魅力あるまちづくりを目指している。市内に点在する歴史資源と豊富な自然をネットワークする「散策路」や公共交通システム等の検討を本格化させることが急務。どうしたら実現できるか、極限まで思い詰め、その活路を見出したい。（井）

太宰府の文化財

165

光明寺の観音堂と山門



▲観音堂

観音堂（無畏閣）

江戸時代

光明寺のモミジがきれいな庭の奥に建っています。モミジの葉が開いているときは、その陰になって見えにくいのでその存在はあまり知られていないかもしれません。

周囲は格子の板戸や部に納めており、屋根は中央に宝珠を載せて四方に広がる宝形造で、お堂というイメージにピッタリの姿です。現在「無畏閣」という額が掲げられ、木造十一面観音坐像（平成9年10月1日号掲載）が祀られているので観音堂と呼ばれていますが、残る棟札には「明治五年浦之坊の護摩堂を移す」と書かれていて、このお堂の前身が知られます。

護摩堂というのは護摩壇が置かれ、護摩が焚かれる所です。護摩は仏教の密教で、護摩木を焚いて、息災・増益・降伏などを祈る修法です。

浦之坊は安楽寺（現在の太宰府天満宮）の菅原道真の子

孫の家といわれる五つの別当家の一つです。現在の小鳥居小路の真ん中あたりに屋敷がありました。

明治元年（1868）の神仏分離令までは太宰府天満宮はお寺でもありましたので、五別当はお坊さんでした。それで浦之坊に護摩堂があっても不思議ではありません。それが、神仏分離によって太宰府天満宮が神道一本になると、境内の仏教的なものは、他のお寺へ移したり、払い下げら

山門

光明寺には、もう一つ浦之坊から移したといわれる門が山門として使われています。

中心の親柱の前後に2本ずつの控柱がある四脚門で、17世紀後期の形式に近いと考えられています。

言い伝えでは安楽寺の子院から移築したとされ、軒下に残る家紋と思われる彫り物が

れたりして天満宮を出て行ききました。

浦之坊もこの時、お坊さんをやめたので、お寺の施設であった護摩堂も光明寺に移築されたのでしよう。

以上のようないわれのある観音堂ですが、もともとの建立年代ははっきりせず、おおよそ、江戸時代末の19世紀ごろの建物と考えられています。また護摩を焚くと煤けるのですが、この堂はあまり護摩を焚かなかったか、移築の際に材を洗ったのか、内部が煤けていません。

江戸時代

井桁に梅鉢という、浦之坊の紋と似ているので、浦之坊の門だったと推測されています。ただ規模が小さいので、表門ではなく、内部の門であったろうということですが。

これらは安楽寺の子院（社家）の面影が残る貴重な建物です。

太宰府の文化財

孔雀図屏風

二曲一双

縦166・8cm 横176・0cm
紙本彩色 西正寺蔵

166



写真は新町の西正寺に伝わる屏風です。松に白牡丹、そのそばで穏やかな時を過ごす雌雄一対の孔雀が描かれています。現在は屏風ですが、画面をよく見ると、両端の中央部に円形の、襖の引手の痕と思われるものが残っているの
で、もともとは襖だったのを屏風に仕立て直したというこ

とが分かります。

さて、片方の屏風の隅に書かれた「明治十五年壬午六月 中流応需 秀山逸人」から、この絵が明治15年に萱島秀山によつて描かれたことが分かります。秀山の話をする前に中流というのは、月の中旬の意味です。

では秀山についてですが、

彼は幕末の安政5年（1858）に萱島鶴栖の長男として太宰府に生まれ、本名は源太郎といいました。父鶴栖も絵師でしたが、秀山も博多の石丸僊舟や日田の平野五岳、そして太宰府の吉嗣梅仙などに絵を学んでいます。書も大変上手で、天皇や皇太子の巡行の際に御前で揮毫をしたり、絵を献上したりしています。

ただ、秀山は30歳前に太宰府郵便局長になり、40年以上その職を勤めながらの絵師の仕事でした。

この屏風の絵は、前述のとおり明治15年ということは秀山23歳のときの作品ということになり、その若さで、襖絵を描くことを求められた秀山という人の技量がしのばれます。萱島家は秀山の後も、秀岳、秀峰そして現当主の秀溪氏と絵師の伝統が続いています。

最後に、二曲一双という表示は二つ折りの屏風が一對という意味で、六曲一双は六つに折れる屏風が一對という意。

太宰府の文化財

167

将棋の墨書木札

現存長8・9cm 幅1・8cm

厚さ0・15cm 平安時代後期

西鉄二日市駅操車場跡出土

◀木札の表裏（赤外線写真）



将棋は古代インドで行われていたチャトランガと呼ばれる盤上ゲームが起源といわれています。チャトランガは西へ伝えられて現在のチェスになり、東へ伝わって中国やタイなどのアジアの将棋に変化していったと考えられています。そんな中で日本の将棋は中国から伝わったという説が大方ですが、駒の形や盤の使い方など異なる点も多く、東南アジアルートからの伝播も無視できないという説もあります。

しかしそのころは将棋を樂しむ階層は貴族や上級武士・僧侶などで、広く庶民がするようになるのは江戸時代後半になってからでした。また現在の将棋は古くは小将棋と呼ばれたもので、他に中将棋、大将棋、大大将棋などいくつかの種類があったと伝えられます。中でも中将棋は室町時代から江戸時代の初めごろにかなり行われましたが、結局、小将棋だけが残って今日に至っています。

将棋の変遷も調べるといろいろおもしろいようですが、ここ太宰府でも平成7年の発掘調査で、「桂馬・香車・歩兵」と墨で書かれた木札が出土したのです。場所は西鉄二日市駅そばの操車場跡地で道路を広げるための調査中でした。時代は平安時代後期の11世紀後半から12世紀初めごろと考えられています。

前述したように近年の発掘調査で将棋の駒が出土し始めましたが、その中で一番古い例は現在のところ奈良の興福寺で見つかった11世紀中ごろのもので、この太宰府の木札も大変貴重な将棋資料ということになります。

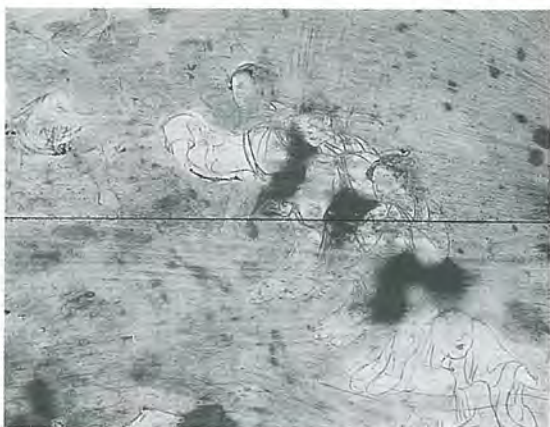
ただこの木札はご覧のように駒の形をしているわけではなく、9cm長さの木片に三つの駒名が少しの間を置いて書き連ねてあるものです。そして他にも墨の痕が残っていて、何度か重ね書きしたものであることが分かります。そこで考えられるのは、単に字の練習が落書きで書いた、自分たちで将棋をしようと思って手製の駒を作ろうと書いたが、結局使わず廃棄したなどです。他に将棋の駒が占いや呪術に使われたと考えられる例もあるそう、それも検討課題です。

木札が作られた状況はいろいろあるでしょうが、およそ900年前ごろ、太宰府に居た人がすでに将棋の駒名を知っていて文字に残したという事実は確かなことです。

地祿神社の絵馬



▲遊楽図 板地着色
縦 118.5cm 横 164.2cm 枠幅 9cm



▲絵馬の右上部分

社寺に祈願のために奉納する絵入りの板額である絵馬については、既に何度か取り上げましたが、今回は大佐野の地祿神社に奉納されていた絵馬を二つ紹介します。

地祿神社には小絵馬や歌仙絵も含めて22枚の絵馬が掛けられていました。その内の9枚は長寿を祝って記念撮影した写真や名前を列記して延寿記念の扁額にしたものでした。

地祿神社で一番古い絵馬は写真の寛政11年（1799）に奉納されたものです。200年の風雪にさらされた画面は、現在ではほとんど見えなくなっていますが、でも目を凝らすと、たくさんの人が輪になって踊っている姿が描かれています。

円陣の中には敷物が敷かれ、その上に数人の人が立ったり、座ったりしている様子です。ここは囃子方や唄い手の席なので、もう見えなくなっている確認できませんが、三味線

や鼓も描かれていたと思われるかもしれません。かすかに扇を持った人が見えますが、この人は唄を唄っているのでしょうか。

踊りの輪は下半分くらいがすっかり消えていますが見える範囲では男の人たちがたくさん踊っています。上半身裸になって踊り狂っている姿が、生き生きと描かれています。うつつすらとしか見えないのですが、とても楽しそうな雰囲気を感じられます。

この絵馬によく似た遊楽図が三輪町の飯峽八幡宮、福岡市西区の飯盛神社、甘木市の須賀神社でも見られます。時代としても明和8年（1771）から文政2年（1819）にかけて奉納されたものですから、大佐野の絵馬もピツタリこの中に入ります。わずかな資料から結論付けるのは危険ですが、江戸時代のこの時期、筑前のこの辺りではこのような風俗図の絵馬が流行ったのでしょうか。それにしても剥落がひどく

華やかだったであろう画面が失われてしまったのが惜しまれます。

もう一つ江戸時代の絵馬があります。明治になる3年前の慶応元年（1865）9月に奉納された絵馬です。画題は、これも剥落が激しいのですが、どうも神宮皇后の三韓出兵の伝説を描いたものようです。大きさは縦110・8cm、横151cm、枠幅8cm。そして絵馬の裏には「榎□神□」の文字が残っていました。

とても興味深いのは銘文の「権藤」で、榎社の社人の家である権藤氏の一族と考えられることです。社人の権藤氏の中に幕末、絵を書く人が出たのでしょうか。現在のところ絵師としては、見ない名前なので、詳しいことは分からないのですが。剥げ落ちてほとんど見えな絵ですが、一生懸命、目を凝らすといろんなことを教えてくれるような気がします。

▼手箱とその中身



▼棺が納められていた墓穴



太宰府の文化財 169

漆の手箱を持った墓 平安時代末期(12世紀後半) 観世音寺一丁目出土

戒壇院の前面、字土井ノ内の調査で発掘された平安時代末のお墓からは、いろいろ興味深い品が見つかりました。

墓には木製の棺が置かれていました。大きさは1・94m、幅約60cmと復原でき、その中に頭を北に膝を「く」の字に折り曲げた人―一緒に埋葬された品から大人の女性ではないかと推測される遺体が葬られていました。

さて注目の埋葬品ですが、まず遺体を埋めるときにお供え物などを置いたと思われるお皿類が11枚出ています。9枚はいわゆる素焼の土器―土師器ですが、2枚は中国からの輸入品である青磁の皿でした。揚子江の南、現在の浙江省の龍泉という窯で焼かれた、直径約13cmのかなり大形の美しい青磁です。このような高級品を持つていることもすごいことなのですが、このお墓が特に注目されたのは、次の埋葬品でした。

漆の手箱。グシャッと押し

つぶされた状態でしたが、黒漆塗りの化粧手箱です。お墓の主は女性であろうと前述したのは、この手箱ゆえです。

手箱の構造は身本体、中にはめ込まれた箱―懸子、そして蓋からなり、つぶれているので大きさははつきりしません。身の深さは少なくとも13cm、懸子の大きさは長辺30cm、短辺22cmくらい、従って身や蓋はそれより一回り大きくなるという大きさです。身の長辺側の両側中央には紐を通すための吊金具が付いています。浦島太郎の玉手箱の絵を思い出してください。

蓋を開けると煙ではなく、懸子には直径約11cmの鏡(湖州六花鏡)、中国福建省の同安窯産の青磁皿そして筆の軸のようなものその他が納められており、その下の身本体には中国製の青白磁の水注が注口と把手を故意に打ち欠いた形で置かれていました。水注の大きさは底径8cm、高さが8・8cmで薄い水色の美しい

釉がかけられた良品です。鏡は布そして雲母びきの上質の紙と二重に包装され、手箱自体も布で包まれるなど、大切に棺に納められたことが想像されます。死者の生前の愛用品だったのでしょうか。

さて、現存している手箱では13世紀の例がありますが、今回のように12世紀後半の手箱出土は初めてです。その上、伝世品の多くは実用品というより神仏に奉納された特殊品であるのに対し、これは日常に使われていた手箱だということ。そのため奉納品に比べると、蒔絵などなく黒漆塗りだけです。中味の化粧道具も洗練されてはいませんが、それがより実用品としての存在を際立たせます。

無残にもつぶれた漆の手箱ですが、平安時代の末ごろには確かに手箱という調度品が存在し、漆塗りの技法、金属工芸の技術など美術工芸史の上で貴重な情報がつまった魔法の手箱とも言えましょう。

太宰府の文化財

170

いけどうろうの人形

明治～大正時代 連歌屋出土



▲連歌屋出土の人形



▲福岡市箱崎の人形祭り

太宰府天満宮幼稚園の道をはさんで西側、現在公園になっている所を発掘調査したとき、土蔵の解体に伴う大きなゴミ穴から30体以上の素焼きの人形が出てきました。土蔵の解体は明治から大正にかけてのころでした。

写真①のように人形は兵隊や馬、家の屋根などで、粘土をひねって素焼きし、色を付けただけの簡単なものです。いったい何だろうということ

でしたが、どうもそのころ、博多を中心に行われていたお盆の「いけどうろう」と呼ばれる人形飾りの人形ではないかということになりました。

出土した人形に直接関係するのは明治の日清戦争のころから盛んになり、昭和初めの日中戦争ころには次第に廃れていった兵隊人形を飾るいけどうろうだったと思われ、それが、ルーツは江戸時代ころ一般化した箱庭飾りではないか

と考えられます。

江戸時代に書かれた歳時記類のお盆の様子を描いた絵を見ると、店先や家の前に置いた縁台の上に草木や人、城などの細工物を飾った箱状の台が置かれています。そして軒下には普通の盆提灯のほか、いろいろ細工を凝らした切子燈籠などの盆燈籠が吊るされています。

また、盆踊りの絵には、縁台に飾られた箱とそっくりのものをかぶって踊っている姿も描かれ、その箱の上にはやはり草や木、花などの細工物が付いていて、どうもそれを燈籠と言ったようです。

さて、お盆以外でも、江戸時代には箱の中に砂を入れ、小さな木や人形、家、橋などを配して山水や庭園を作る箱庭が流行します。それは室町時代に行われた盆石や盆景が庶民に普及したものです。

以上のように江戸時代に流行了った箱庭と人の見せ物として趣向を凝らした盆の飾り物

を総称するようになったと想像される燈籠が合わさってきたのが博多のいけどうろうではないかと考えるのです。それが日清戦争以後の軍国日本を中心に飾るようになって大いに流行ったのではないのでしょうか。それも敗戦により昔ながらの町並みや暮らしが大きく変わってしまい、次第に行われなくなつたのでしょう。

ただ現在も福岡市箱崎の網屋町・原田・馬出地区では7月23・24日の地蔵盆に「人形飾り」といって家々や神社の境内、公園などで箱庭を作つて人形を飾り(写真②)、お供え物をあげ、燈明をともして、死者を供養すると共に子供たちの健やかな成長を願うお祭りが行われています。

兵隊人形や野球選手など昔の名残である素焼きの人形のほか、時代を反映してプラスチック製の怪獣や動物、デイズニーの人気者たちが箱庭を飾っていました。